

第38回 阿久&都倉コンビが生んだ 意外で素敵な三角関係

昭和41年9月、遠藤実の名前にちなんでつけられたレーベル「ミノルフォンレコード」から『こまっちゃうナ』でデビューしたとき、山本リンダは15歳でした。

「リンダ、こまっちゃう」の流行語とともにかなりのヒットを記録しましたが、その後は鳴かず飛ばずの状況が続き、名前も忘れられかけた頃突如として登場したのが『どうにもとまらない』（昭和47年6月発売）でした。

レコード会社を変え、作詞に『また逢う日まで』でレコード大賞を受賞したばかりの阿久悠、作・編曲に伸び盛りの若手、都倉俊一を新たに起用、都倉は変身後のリンダの姿を想像しながら曲作りを始めたそうです。

曲先行で作られたものに阿久悠が衝撃度の高い歌詞を見事にはめ込み、当初の題名『恋のカーニバル』を『どうにもとまらない』に変更、リンダもそれまでの発声と日本語の唱法を変え、セクシーな振りを付けること

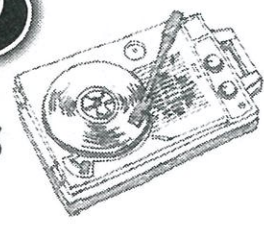
で、21歳になったリンダの話題作が完成します。

変身第2弾の『狂わせたいの』も

名曲カルテ

昭和歌謡と いっまでも

堀井六郎 絵
松本浦 絵



ヒットし、リンダのセクシー路線は確立されますが、実はこの『狂わせたいの』のB面『もったいいことないの』がなかなかの曲者なのです。昭和歌謡ファンなら聞けばすぐにおわかりになるでしょう、そこにはフィンガー5とピンク・レディーの世界が垣間見られるのです。

それぞれ全盛期にはタイムラグがありますが、このB面曲からはその翌年（昭和48年）発売のフィンガー5『個人授業』や昭和52年発売のピンク・レディー『UFO』らしきサウンドやメロディーが聞こえてきます。

フィンガー5の晃君の変声期前のハイトーンは女声の音域に近く、『もったいいことないの』も『個人授業』も同じキー（C）で歌われているこ

ともあって、『もったいいこと』を何度か聴いていると、そのうち晃君が歌っているような不思議な感覚に襲われます。

阿久&都倉コンビによる異色歌謡ポップスの流れが、フィンガー5からさらにピンク・レディーへと続いていくことを予兆するようなB面曲ですが、リンダ、フィンガー、ピンクの各々のシングル盤A面を再聴し音楽的関係を知ると、都倉の創作の背景が見えてきます。「使い回し」と言うなかれ、これもまた昭和歌謡の隠れた楽しみの一つでもあるのです。

時代を反映していたピンク・レディー作品の「題名の斬新さ」と「テーマの特殊性」は、都倉によると、阿久との共同作業だったようです。発表当初はキワモノ的な見方もありましたが、その面白さを最初に理解したのは、桃色チックな視線で彼女たちを見ていたオヤジ世代ではなく、テレビを見ていて一緒に体が動いてしまった子供たちでしたし、フィンガー5を支えていたのも晃君と同時代の小学生ファンでした。そういうえば、リンダがミノルフォン在籍末期に遠藤実から提供されたのは『トンボのメガネ』という曲でした。

ほりい・るくろう 昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。著書に『私の「昭和歌謡考」』第1～3集（グスコ出版）がある